

国際仏教学大学院大学研究紀要
第 11 号 (平成 19 年)

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XI, 2007

黒ヤジュール・ヴェーダ・サンヒターにおけるラクシャス

伊澤 敦子

黒ヤジュル・ヴェーダ・サンヒターにおけるラクシャス*

伊澤 敦子

1. はじめに

ラクシャスはリグ・ヴェーダから叙事詩やプラーナといった文献にわたって様々に描写されているが、その実態は掴みにくい¹。そのためか、ぴったり当てはまる訳語が限定されず、ラクシャスとしか言い表せない²。それ故、今回はひとつの試みとして、黒ヤジュル・ヴェーダ・サンヒターに限ってラクシャスに関わる全ての記述を検討してみた。本論は、その結果をまとめて黒ヤジュル・ヴェーダ・サンヒターにおけるラクシャスの特質、退治法等を提示し、更に、当文献における記述の特徴を指摘すること

* 本論は、日本印度学仏教学会第 57 回学術大会において発表され、『印度學佛教學研究』第 55 卷第 3 号、pp. 1-6 にて掲載されたものに大幅に加筆したものである。

¹ RV では中性の *rákṣas* と男性の *rakṣás* とが区別されている。中性の *rákṣas* は *yātumávat* (妖術師のような存在) によって繰り出された幻力と見なされることがあり、また *ámivā* (疫病) と共に言及される場合がある。他方、男性の *rakṣás* は鳥などの姿を取ることがある。また、*rakṣasvín* (*rákṣas* を持つもの) という単語の存在は中性の *rákṣas* が幻力であるとする見方に合致する。しかし中性の形は取っていても意味的には男性形のものとの区別が曖昧で、擬人的に捉えられる場合が多い。Cf. Hale [1986], pp. 126-145, Patton [2005], pp. 131-132, 221-223.

尚、KS と KapS にはアクセント記号が殆ど付されていないので、それに従った。

² *rákṣas* の第一義は、(損傷、破損) であるが、文中では訳語としてそぐわない。また語源がはっきりしておらず、 $\sqrt{rákṣ}$ (損なう) という動詞が存在するという確証はない。むしろ、 $\sqrt{rákṣ}$ (守る、見張る) から派生したと思われる「妨げる」という意味と関連があると考えられる。Cf. ŚB 1.1.1.16; 2.1.4.15. Mayrhofer (EWAia) II, pp. 422-423. (KEWA) III, p. 30. Wackernagel [1954-75], I-2, p. 133. Whitney [1885], p. 134. Oertel [1926], pp. 79-80.

を目的とするものである。

2. ラクシャスの特質

ヴェーダ祭式においては、ラクシャス³は祭式や神々に敵対し、絶えず祭式及びそれに関連する事物を破壊しようと企て（或いは破壊し）、最終的に祭主や祭官によって何らかの方法で排除される存在である。ここではラクシャスの破壊対象、活動領域等に関する記述を見ていく。

2-1. 破壊対象

ラクシャスが破壊しようとする（√han）対象として最も多く挙げられるのは祭式そのものであるが⁴、その他に以下のものがある。

アグニによって天界に行った神々。

KS 22.7 (63.1-4)=KapS 35.1 (177.1-4)

生まれたてのアグニ。 TS 5.1.10.1 / KS 8.5 (88.13-14)=KapS 7.1 (71.5)
/ KS 19.10 (11.18, 20)=KapS 30.8 (145.20); MS 3.1.9 (12.14-17)

³ 本論では中性のラクシャス (rākṣas) のみ扱う。男性のラクシャス (rakṣás) は RV の 33 例に対して、ブラーフマナではわずか 3 例であり、黒ヤジュル・ヴェーダ・サンヒターでも 11 例を数えるにすぎず、全てマントラの中に見出される。これら 14 例の相互関係は以下の通りである。

TS 1.2.14.1=MS 2.7.15 (97.7-8)=KS 16.15 (238.18-19)

TS 1.2.14.6=MS 4.11.5 (174.7-8)=KS 6.11 (62.5-6)

TS 4.1.5.1=MS 2.7.5 (79.16-17)=ŚB 6.4.4.21

TS 4.4.4.6=MS 2.13.8 (157.13-14)

MS 4.14.6 (223.9-10)=TaiB 2.8.4.6

TaiĀ 1.10.4

⁴ MS 3.9.7 (125.7-9; 126.2-4) / KS 26.8 (131.21-132.1)=KapS 41.6 (242.4-6) / KS 25.8 (114.5-7)=KapS 40.1 (220.16-19) / MS 3.3.5 (38.8-9) / MS 3.3.7 (40.9-11) / KS 24.8 (99.15-17)=KapS 38.1 (205.13-14) / MS 3.10.1 (129.14-19) / MS 3.7.4 (80.13-15) / TS 5.1.3.4; 5.2.7.5; KS 19.3 (3.15-17)=KapS 30.1 (138.9) / TS 6.1.7.3; 6.2.10.1 / KS 20.5 (23.16-17); MS 3.2.6 (24.4) / KS 22.11 (67.8-9)=KapS 35.5 (181.2-4) / KS 29.8 (176.13-14; 177.21-178.1)

潔斎された者が眠っている間に。 TS 6.1.4.5

アーハヴァニーヤ（=天界）。 KS 26.2 (122.18)=KapS 40.5 (228.20-22)

アグニを集めようとする馬とロバ。 MS 3.1.3 (4.9)

火にくべられた祭餅 (puroḍāśá)。

KS 31.7 (8.13-14)=KapS 47.7 (290.1-3); MS 4.1.9 (11.13-15)

天界に昇るもの (ソーマ)。

KS 24.6 (96.20-97.3)=KapS 37.7 (201.16-17; 202.3-5)

また、 $\sqrt{\text{han}}$ 以外に次のような動詞が使用されている。

祭式を勝ち取る ($\text{abhi-}\sqrt{\text{ji}}$)。 KS 26.1 (121.4)=KapS 40.4 (227.7-8) / KS

28.4 (157.13)=KapS 44.4 (259.13-14)

($\acute{\text{ava-}}\sqrt{\text{ji}}$)。 MS 3.9.5 (121.15-17); 3.10.6 (138.9-11)

車軸が軋む時、祭式にくつつく ($\sqrt{\text{sac}}$)。 TS 5.2.2.3

器 (pātra) にくつつく ($\sqrt{\text{sac}}$)。

KS 27.5 (144.13-15)=KapS 42.5 (252.16-18)

1つの神格への犠牲獣が大きすぎるとそれにくつつく ($\sqrt{\text{sac}}$)。

TS 3.4.1.1

ヴリトラを殺したインドラにくつついた。潔斎された者にくつつく ($\sqrt{\text{sac}}$)。

KS 23.1 (73.8-9)=KapS (182.13-14)

動物が生まれる時くつつく ($\acute{\text{anu-}}\sqrt{\text{sac}}$)。 TS 6.3.10.3

祭式に行く ($\acute{\text{ava-}}\sqrt{\text{i}}$)。 MS 3.8.7 (104.13-15)

祭式を追って行く ($\acute{\text{anv-}}\acute{\text{ava-}}\sqrt{\text{i}}$)。 MS 4.5.1 (63.12-13); 4.6.2 (79.1)

uttaravedi⁵の周りで武者震いしている (sam-pra- $\sqrt{\text{kamp}}$)。

KS 25.6 (110.3-5)=KapS 39.4 (215.24-216.3)

神々の供物をこっそり取った ($\acute{\text{ahutir}} \text{ nir}\acute{\text{skāvam}} \acute{\text{adan}}$)。

KS 20.5 (23.21-24.2)

2-2. 方位との関係

ラクシャスは常に南から祭式等に妨害行為をおよぼそうとする⁶。従っ

⁵ 東側につくられる高い祭壇。śālā (小屋) よりも外側に位置している。

てそれに対する処置も南側になされる。

āgnīdhra 祭火のある場所より南で（祭式が行われる）。

KS 28.4 (157.13-14)=KapS 44.4 (259.13-14)

水レンガを南に置く。 TS 5.2.10.1

kārṣmaryā 樹製の（祭匙）を南に置く。 TS 5.2.7.4; KS 20.5 (23.21-24.2)

ブリハスパティに属するレンガを南側に置く。

KS 22.11 (67.8-9)=KapS 35.5 (181.2-4)

祭柱を南に運んで、置く。 KS 29.8 (177.21-178.1)

祭壇 (vedi) を南向きに傾斜させる (dakṣinata udvanām kuryāt)。

KS 25.4 (107.7)=KapS 39.1 (213.7)

神格達により南側から捕らえられる (ālabhyante)。 KS 29.8 (176.13-14)

南から阻止すること (vāro dākṣiṇā)。

KS 15.2 (210.18-211.6); MS 2.6.3 (65.3-14)

しかし、動物を西に放すとラクシャスがそれを殺してしまう⁷。

更に、以下のような記述がある。

アグニの為の一盛の液状バター (ājyabhāga) の献供は北側でされるべきで、それはラクシャスを神格とする (rakṣodevatyā)。ソーマの為の一盛の液状バターの献供は南でされるべきで、それは祖霊を神格とする。

MS 1.4.12 (61.15-17)

2-3. 活動時間

ラクシャスが活動するのは夜である⁸。と言うのも、神々により昼から排除されて、夜に入ったからである⁹。

⁶ MS 3.3.7 (40.9-11) / KS 22.11 (67.8-9)=KapS 35.5 (181.2-4) / KS 26.1 (121.4-5) =KapS 40.4 (227.7-8) / KS 28.4 (157.13)=KapS 44.4 (259.13-14) / KS 29.8 (176.13-14) / KS 20.5 (23.21-24.2)

⁷ TS 5.2.5.3; KS 20.3 (21.8)=KapS 31.5 (152.12)

⁸ TS 2.2.2.3; KS 7.10 (12.10-11)=KapS 5.9 (58.1-2)

⁹ KS 7.10 (12.5-6); KapS 5.9 (57.16)

2-4. その他

ラクシャスは血との関わりが深く¹⁰、犠牲獣を切った時に流れた血をつけた草や¹¹、犠牲獣の腸間膜が彼らの分け前であるとされている¹²。

また、新月・満月祭で牛乳をナツメ (kvāla) で凝固させると、それはラクシャスの為のものになる¹³。さらに、ハイエナ (tarākṣu)、犬、黒耳のロバ (gardabhā) はラクシャス達に属するという記述もある¹⁴。

3. ラクシャスの退治法

前節で挙げたラクシャスの行為に対して、どの様な対抗処置がとられているのであろうか？ まず、ラクシャス退治に当たって名前が上げられる神格、次に実際の対抗処置、最後にその結果について見ていく。

3-1. 対抗する神格

ラクシャスを殺すものとして、諸神格の名が列挙されている場合は、以下の通りである。

アグニ、ヤマ、サヴィトリ、ヴァルナ、ブリハस्पティ。 TS 1.8.7.2

アグニ、ヤマ、マルト、ミトラ・ヴァルナ、ソーマ。

KS 15.2 (210.19-211.6); MS 2.6.3 (65.4-14)

器にインドラ・ヴァーユの祭餅 (purodāsa) とミトラ・ヴァルナの凝乳 (payasyā) とアシュビンの dhānā¹⁵を置く。

¹⁰ KS 16.21 (244.17) / KS 31.4 (5.18)=KapS 47.4 (288.10-11); MS 4.1.7 (8.16-17) / MS 3.15.8 (180.2)

¹¹ TS 1.3.9.2; 6.3.9.2

¹² KS 34.15 (46.16)

¹³ TS 2.5.3.5

¹⁴ 剣 (khaḍgā) は一切神に、ハイエナ (tarākṣu)、犬、黒耳のロバ (gardabhā) はラクシャス達に属する。豚 (sūkarā) はインドラに、獅子はマルト神群に属する。トカゲ (kṛkalāsā)、pipakā 鳥、śakūni 鳥、それらは矢を射ることのため (śaravyā) である。まだらのレイヨウ (pīṣat) 達は一切神達の為。MS 3.14.21 (177.4)

KS 27.5 (144.13-15)=KapS 42.5 (252.16-18); MS 4.6.2 (79.1)

中でも言及されることが圧倒的に多いのはアグニである¹⁶。また、ミトラ・ヴァルナ¹⁷、インドラ・ソーマ¹⁸、更にブリハस्पティ¹⁹、ソーマ²⁰、インドラ²¹が単独で挙げられる。また、ヴィシュヌに捧げる讃歌が唱えられる²²。プラジャーパティが意 (mánas) で祭式を行ったという記述も見られる²³。

3-2. 対抗処置

やはり祭火が最も多用される²⁴。犠牲獣から腸間膜を取り出す際は、ラクシャス予防に、火を持って周囲をまわったり、前に進んだりする²⁵。祭火がない場所で献供する場合、その代わりに黄金を置くか²⁶、或いは水を注ぐ²⁷。ラクシャス達は水の流れを渡ることが出来ないからである²⁸。水

¹⁵ dhānā の調理法については、Einoo [1985], pp. 16, 21 参照。

¹⁶ TS 1.2.14.7; 4.7.13.1; 6.1.4.6 / TS 4.4.4.6; KS 39.15 (133.13); MS 2.13.8 (157.14) / TS 6.1.7.3 / TS 2.2.2.2; 2.2.3.2; 2.4.1.2-3 / MS 4.3.4 (43.16-20) / KS 2.14 (19.12) / KS 2.15 (21.14); MS 4.11.2 (167.12) / KS 15.12 (219.4) / KS 18.15 (275.19)=KapS 29.4 (131.12); MS 2.12.3 (146.8) / KS 31.7 (8.13-14)=KapS 47.7 (290.1-3); MS 4.1.9 (11.13-15) / KS 38.12 (114.14-15) / MS 4.11.5 (174.9)

¹⁷ KS 11.11 (158.11, 15); MS 2.3.1 (27.19, 28.1)

¹⁸ KS 23.11 (87.3)

¹⁹ MS 4.8.5 (112.10; 113.8-9; 11-14)

(神々は) それらをブラフマンで排除した (apāghnata)。ブラフマンはブリハस्पティ。ブリハस्पティに属するレンガを南側に置く。KS 22.11 (67.8-9)=KapS 35.5 (181.2-4)

²⁰ TS 6.1.11.3; 6.3.2.1

²¹ KS 7.10 (72.9)=KapS 5.9 (57.19) / KS 37.8 (88.17-18)

²² TS 6.2.9.2 / KS 25.8 (114.5-7)=KapS 40.1 (220.16-19); MS 3.8.7 (104.13-15)

²³ TS 1.6.8.4

²⁴ TS 1.1.2.1; 1.1.4.1; 1.1.10.1; 1.2.14.6-7 / TS 1.1.7.1; KS 1.7 (3.15)=KapS 1.7 (5.16) / KS 10.5 (130.2-7); MS 2.1.11 (13.2-7) / KS 15.2 (211.2); MS 2.6.3 (65.11)

²⁵ TS 6.3.8.1-2; MS 3.9.7 (126.2-4) / TS 6.3.9.4

²⁶ TS 5.1.3.2; KS 19.3 (3.6-8)=KapS 30.1 (138.9-11) / TS 6.1.8.3; 6.2.9.3

²⁷ KS 24.4 (93.16-17)=KapS 37.5 (198.17-19)

は注がれる他に²⁹、以下のようにも使用される。

水でいっぱいの器を置く。 TS 6.4.9.5

水を周り中を廻って運ぶ。 MS 2.5.6 (55.5)

水がたまっている所 (nyáyana) から、apāmārgá 植物を持ってくる。水はラクシャスを殺すもの。 MS 4.3.4 (43.13-15)

ラクシャスの侵入を防ぐには献供場所の周囲を閉じることも有効である³⁰。それには、周囲に線を引く³¹、囲い木を周りに置く³²といった方法がある。また囲い木を3回ずつこするのも効果的である³³。その他に、ラクシャス達のあらゆる方向からの侵入に対し、諸神格達によって周囲を固める方策も取られる³⁴。更にこの囲い木は kārṣmaryā 樹であることが対ラクシャスの為に求められる³⁵。その他に2つの腸間膜 (vapá) を焼くための串 (vapāśrápaṇi) や³⁶、祭匙も kārṣmaryā 樹製と指定されている³⁷。また囲い木で周囲を取り巻く際に、前方（東側）には置かない。何故なら、東からは太陽がラクシャスを排除するからである³⁸。そして、上方からの襲撃は薪を立てて置いて防ぐのである³⁹。祭壇に薪を置く際には、「囲んで (parigfhya)」と唱える⁴⁰。

²⁸ MS 4.1.3 (5.17); 4.3.4 (43.13-15); 4.5.1 (63.12-13); 4.8.5 (112.10; 113.8-9, 11-14)

²⁹ TS 2.5.11.7; 2.6.4.4; 6.4.2.6 / KS 31.2 (3.17-18)=KapS 47.2 (286.14); MS 4.1.3 (5.17) / KS 31.3 (4.1-3)=KapS 47.3 (286.17-19)

³⁰ TS 2.2.2.3

³¹ TS 5.1.3.4; KS 19.3 (3.15-17)=KapS 30.1 (139.1)

³² TS 2.6.6.2; KS 31.10 (12.19-13.2)=KapS 47.10 (264.5-10) / TS 2.6.6.3; 6.2.1.6 / KS 31.10 (12.19-13.2)=KapS 47.10 (264.5-10) / TS 6.2.1.6; MS 3.7.9 (89.17) / MS 3.9.5. (121.15-17) / KS 24.8 (99.15-17)=KapS 38.1 (205.13-14)

³³ TS 6.3.7.2

³⁴ KS 25.6 (110.3-5)=KapS 39.4 (215.24-216.3)

³⁵ TS 6.2.1.6; MS 3.7.9 (89.17); KS 24.8 (99.15-17)=KapS 38.1 (205.13-14)

³⁶ MS 3.10.1 (129.14-19)

³⁷ TS 5.2.7.4; KS 20.5 (23.21-24.2)

³⁸ TS 2.6.6.3; 6.2.1.6 / KS 31.10 (12.19-13.1)=KapS 47.10 (264.8); MS 4.1.13 (18.2-3)

³⁹ TS 2.6.6.3; 6.2.1.6 / KS 31.10 (13.1-2)=KapS 47.10 (264.9); MS 4.1.13 (18.3-4)

⁴⁰ TS 5.4.6.3; KS 21.8 (47.18-19)

動物の中では、馬がラクシャスを殺すものとされる⁴¹。それ故、アグニ探索の折、馬を先頭にして連れて行くのである⁴²。その他に、液状バター⁴³、黒レイヨウの皮 (kr̥ṣṇājina) ⁴⁴などが挙げられる。

これらの対策が施されるに当って、殆どの場合、マントラが唱えられる⁴⁵。多くの場合、それは正しくラクシャスを殺すもの (rākṣoghñā) と名づけられる決まったマントラであるが⁴⁶、その他にも様々なマントラが唱えられる⁴⁷。更に、vāṣat⁴⁸或いは vāt⁴⁹と叫ぶことでもラクシャスを防ぐこ

⁴¹ TS 1.2.14.6

⁴² KS 8.5 (88.14)=KapS 7.1 (71.6) / MS 3.2.5 (22.17-18)

⁴³ アグニチャヤナで、レンガを積む前の段階で、黄金の環にバターを注ぐ (vyāghārāyati)。TS 5.2.7.5; MS 3.2.6 (24.1-5)。Vaisarjanā 献供。TS 6.3.2.2

⁴⁴ 黒レイヨウの皮を（ソーマに）かぶせる。TS 6.1.11.4; KS 24.6 (96.20-97.3)=KapS 37.7 (201.16-17; 202.3-5)

⁴⁵ マントラについては RV や AV との関係を考慮せねばならず、改めて検討する予定である。

⁴⁶ TS 1.2.14.1-6 / KS 6.11 (61.11-62.6)=MS 4.11.5 (173.4-174.8) / KS 16.15 (288.18-239.4)=KapS 25.6 (100.2-10)=MS 2.7.15 (97.7-17) / KS 20.5 (23.16-19)=KapS 31.7 (154.17-20) / TS 5.1.10.2; KS 19.10 (11.18, 20)=KapS 30.8 (145.20-22); MS 3.1.9 (12.14-17) / KS 10.5 (130.2-7); MS 2.1.11 (13.2-7) / MS 3.2.6 (24.1-5) / KS 26.8 (131.20-132.1)=KapS 41.6 (242.4-6)

⁴⁷ TS 5.1.3.3 / TS 5.1.5.9 / TS 5.4.6.2 / KS 31.3 (4.17)=KapS 47.3 (287.11-12) / KS 19.3 (3.12-13)=KapS 30.1 (138.15-139.1) / KS 25.9 (115.20-116.1, 10-117-2)=KapS 40.2 (222.14-15, 223.1-17) / KS 24.6 (96.20-97.3)=KapS 37.7 (201.16-17; 202.3-5) / KS 26.7 (131.12-13)=KapS 41.5 (241.15-17) / KS 31.7 (8.13-14)=KapS 47.7 (290.1-3); MS 4.1.9 (11.13-15) / MS 1.5.1 (67.5) / MS 3.10.1 (129.3-6) / MS 4.1.8 (9.16) / MS 4.1.5 (7.4) / MS 4.3.4 (43.16-20) / MS 4.8.5 (112.10; 113.8-9; 11-14) / MS 1.4.10 (58.9-12)

“prātyuṣṭam rākṣa” と唱えて。KS 31.9 (11.13-14)=KapS 47.9 (263.6-7) / KS 31.1 (1.4); MS 4.1.2 (2.15) / KS 31.3 (4.5-6); MS 4.1.4 (6.8-9) / KS 31.7 (8.8-9)

“niṣṭaptam rakṣa iti” と唱えて。KapS 47.1 (284.3); 47.3 (286.22-287.1)
ヴィシュヌに捧げる讃歌。

TS 6.2.9.2; KS 25.8 (114.5-7)=KapS 40.1 (220.16-19); MS 3.8.7 (104.13-15)
yājyā と anuvākyā はラクシャスを殺すもの。TS 2.2.2.3
āpratiratha で。MS 3.3.7 (40.9-11)

⁴⁸ KS 19.5 (5.8-10)=KapS 30.3 (140.16-17)

とが出来ると。また、sáman もラクシャスを殺すものと見なされ⁵⁰、br̥hád-rathantara という 2 つの sáman が詠唱される⁵¹。

対ラクシャスに有効な物のうち以下の物はヴァジュラに置き換えられて言及される。

劍 (sphyá)。

KS 31.8 (11.1-2)=KapS 47.8 (292.18-19); MS 4.1.10 (14.10-11)

15。 KS 20.13 (33.17-18)

kārṣmaryà 樹。 TS 5.2.7.4

水レンガ。 TS 5.2.10.1

祭柱。 KS 29.8 (177.21-178.1)

水。 KS 31.3 (4.3)=KapS 47.3 (286.8-19)

その他の対処法として、以下のようなものがある。

āgnīdhra 祭火のある場所から座 (dhiṣṇya) を離す。

KS 26.1 (121.4-5)=KapS 40.4 (227.7-8)

祭壇の周りを歩く。 TS 6.4.10.3 / MS 3.9.7 (125.7-9); 4.3.4 (43.16-20)

反響の穴 (uparavá) を掘る。 TS 6.2.11.1

木の臼 (aulūkhala) や石のすり板 (dṛṣad) で。

KS 32.7 (26.3)

潔斎された者が軟膏を塗る (ā-√ añj)。

KS 23.1 (73.8-10)=KapS 35.7 (182.13-15)

穿たれたレンガ (vitṛṇṇī) を置く。

KS 22.7 (63.1-4)=KapS 35.1 (177.1-4)

ソーマを麻布 (kṣauma) で包む (úpa-√ nah)。 MS 3.7.4 (80.12)

祭柱は祭壇の近くに運ぶ。 MS 3.10.6 (138.9-11)

3-3. 目的・結果

以上のような方策を講じる目的として、あるいは、講じた結果として使

⁴⁹ TS 5.1.5.2; 5.4.5.1

⁵⁰ TS 6.6.3.1-2; TS 2.5.7.2

⁵¹ MS 3.3.5 (38.8-9)

用される動詞で一般的と言って良いほど頻出するのは、排除する ($\sqrt{\text{han}}$) である⁵²。

その他の表現で、目的として使われるのは、
 駆逐の為 (pārāṇuttyai)。 MS 3.9.7 (126.2-4)
 落とす為 (dhvarāyai)。

MS 3.7.8 (86.13-14); 3.10.1 (129.3-6); 4.3.4 (43.16-20)
 遮る為 (antāṛityai)。 MS 3.7.8 (86.13-14); 3.10.1 (129.3-6)
 続々と勝たないように (ānanvavajayāya)。 MS 3.9.5. (121.15)
 続々と追いかけてこないように (ānanvavāyāya)。 MS 3.6.1 (60.4-5)
 (ānanvavacārāya)。 TS 1.6.8.4

刺し貫く為 (vinikṣe-)。 TS 1.2.14.7

減ぼす為 (dūṣṭyai)。 KS 10.5 (130.2-7)

ラクシャスに及ぼした行為、結果は以下のように表現されている。
 首を刎ねる ($\text{āpi-}\sqrt{\text{kṛt}}$)。 TS 1.2.5.1; KS 2.5 (11.3-9)=KapS 1.18 (13.13) /
 TS 1.3.1.1; KS 2.12 (17.1-5)=KapS 2.6 (18.10); MS 1.2.10 (19.14-16) /
 TS 6.1.8.4; KS 24.4 (93.7-8)=KapS 37.5 (198.10-11) / TS 6.2.10.2; KS
 25.10 (117.18-118.2)=KapS 40.3 (224.12-13); MS 3.8.8 (105.17-106.4) /
 KS 2.9 (14.8)=KapS 2.3 (16.8-9) / KS 2.11 (16.6)=KapS 2.5 (17.18-
 29) / KS 3.3 (24.2)=KapS 2.10 (20.5) / KS 25.9 (115.16)=KapS 40.2
 (222.10-11) / KS 26.5 (127.10-11)=KapS 41.3 (237.21)

暗闇に導く ($\sqrt{\text{nī}}$)。 TS 1.3.9.2; KS 3.6 (26.1-6)=KapS 2.13 (22.8-12); MS
 1.2.16 / TS 6.3.9.2; (26.12-27.1); MS 3.10.1 (129.3-6)

撃退する ($\text{āpā-}\sqrt{\text{nud}}$)。 TS 2.4.1.2, 3

追いやる ($\text{prā-}\sqrt{\text{nud}}$)。 TS 2.4.1.3

駆逐する ($\text{vi-}\sqrt{\text{nud}}$)。 KS 25.6 (110.3-5)=KapS 39.4 (215.24-216.3)

遠ざける ($\sqrt{\text{sidh}}$)。 KS 2.14 (19.12) / KS 2.15 (21.14); MS 4.11.2
 (167.12) / KS 15.12 (219.4) / MS 4.11.5 (174.9)

殺す ($\sqrt{\text{vadh}}$)。 KS 15.2 (210.18); MS 2.6.3 (65.3-4)

⁵² 例えば、 $\text{rākṣasām āpahatyai}$ (TS 2.6.6.2 等)

- 追い散らす (*vi-√bādh*)。 TS 2.4.1.3
- 去らせる (*ati-√srj*)。 KS 24.7 (97.6)=KapS 37.8 (202.8)
- 防ぐ (*āva-√bādh*)。 MS 3.10.1 (129.5)
- 灰をかぶせる (*abhi-sām-√ūh*)。 KS 15.2 (211.2); MS 2.6.3 (65.10-11)
- 家畜から引き離す (*nīr-√bhaj*)。 MS 3.10.1 (129.4)
- 熱する (*√tap*)、圧する (*√ubj*)、投げ下ろす (*ny-√ṛ, caus.*)。
KS 23.11 (87.3)
- ラクシャスと怪物に争いを齎す (*rākṣobhyāś cābhvebhyāś ca samādam dadhā-ti*)。 MS 4.1.12 (16.19)
- 動物達の代りに血でラクシャス達を満足させ、植物の代りに粃殻で (*tūṣaiḥ*) (満足させる) (*niravādayanti*)。
MS 4.1.7 (8.16-17); KS 31.4 (5.18)=KapS 47.4 (288.10-11)
- 振り払われた (*āvadhūta*)。
TS 1.1.5.1; 1.1.6.1 / MS 4.1.6 (8.2); 4.1.7 (9.5-6)
- 一掃された (*pārāpūta*)。 TS 1.1.5.2
- 遮られた (*antārīta*)。 TS 1.1.8.1
- 燃やされた (*prātyuṣṭa*)。 TS 1.1.2.1; KS 1.2 (1.7); MS 1.1.2 (1.5) / TS 1.1.4.1; KS 1.4 (2.9); MS 1.1.4 (2.6) / TS 1.1.7.1; KS 1.7 (3.15)=KapS 1.7 (5.16) / TS 1.1.10.1; KS 1.10 (5.14); MS 1.1.11 (6.11) / KS 31.1 (1.4); MS 4.1.2 (2.15) / KS 31.3 (4.6); MS 4.1.4 (6.8-9) / KS 31.7 (8.8-9) / KS 31.9 (11.13-14)=Kp 47.9 (263.6-7); MS 4.1.7 (16.7)
- (*niṣṭapta*) KapS 1.2 (3.6); 1.4 (4.12); 1.10 (7.11); 47.1 (284.3); 47.3 (286.22-287.1)
- (*sāmdagdha*) KS 15.2 (211.2); MS 2.6.3 (65.11)
- (*nīrdagdha*) MS 1.1.8 (4.8)
- 捕らえられる (*ālabhyante*)。 KS 29.8 (176.13-14)
- 隠れさせる (*cātāyamāna*)。 KS 16.13 (235.14)=KapS 25.4 (67.4)
- añjanagiri (山) で遮った (*antāradhatta*)。
KS 23.1 (73.8-10)=KapS 35.7 (182.13-15)

4. ラクシャスと他の存在

前節で見てきたラクシャス——常に祭式及びそれに関わる事物を目の敵にし、南から襲撃しかけ、夜活動し、血を好み、火や水、マントラ等に弱く、しかるべく方法で周囲を閉じられた場所には侵入できない——は、吸血鬼のような魔物を連想させるが、この様なイメージは後の時代にまで続いているものである⁵³。次に、ラクシャスと共に列挙されている、或いはラクシャスに言い換えられている語を抽出する。それらは主に以下に上げられる4つのグループに分けられる。

[1] 他のものと

神々がアスラ達を打ち負かし、ラクシャス達を排除した。 TS 2.4.1.2-3 Stoma を先頭とする神々はアスラ達を追い出した。馬は Stoma から生まれた。馬を先に導く。ラクシャス達の排除の為。

KS 8.5 (88.11-14)=KapS 7.1 (71.3-6)

神々、祖霊、人間は一方の側で、アスラ達、ラクシャス達、ピシャーチャ (piśācā) 達が⁵⁴一方の側。 TS 2.4.1.1; KS 10.7 (132.11-19, 133.1-2) 悪霊達 (yātudhānā)、肉食 (kravyāda)、ピシャーチャ達。

KS 37.14 (94.16)

むさぼり食う者達 (atrīn) [pl.]。 KS 23.11 (87.4)

蛇 (āhi)、狼 (vṛka)。 KS 13.14 (196.10); MS 1.11.2 (162.11)

肉体的不具合 (rapas) [pl.]。 KS 16.13 (235.14)=KapS 25.4 (67.4)

腸 (gudā) をひっくり返すと、病気 (udāvartā)⁵⁴が生類を損なうだろう。ラクシャス達が続けて勝たないように。 MS 3.10.6 (138.8-9)

妖術をかけられている者 (abhicaryāmāna) はアグニに8カワラケの聖餅を

⁵³ 叙事詩やプラーナにおいては、ラクシャス達は時に妖術を操る恐ろしい悪魔のような様相を呈し、或いは疫病、女の巨人、荷車、怪鳥などの姿を取って現れる。また、ラーマーヤナでは、ヴェーダの規定に従って実践して得た力を悪用する存在として描かれている。Cf. Venkataraman [1940], pp. 187-188.

⁵⁴ 便秘か? Cf. Keith-2 [1967], p. 528, no. 1.

捧げる。彼 (アグニ) はラクシャス達を排除する。妖術をかけている者 (abhicārant) は彼を倒さない (na str̥nute)。 TS 2.2.3.2

ミトラ・ヴァルナよ、汝ら 2 人の精力的で強力で対魔術的 (yātavyā)、対ラクシャスのな体 (rakṣasyā tanū)、それによって私達は汝らを祭った。それによって (2 者は) 困難からこれとあれを解放した。

MS 2.3.1 (27.19; 28.1)

[2] 抽象名詞と

- (a) 無思慮達 (āmati) [pl.] と敵意達 (ārāti) [pl.]。 TS 5.1.5.9
 (b) 無思慮 (āmati) と悪意 (durmati)。 TS 5.4.6.2
 (c) 敵意達 (ārāti) [pl.]。 TS 1.1.2.1; 1.1.4.1; 1.1.5.2; 1.1.6.1; 1.1.7.1;
 1.1.8.1; 1.1.10.1; 1.2.5.1; 1.3.1.1; 6.1.8.3; 6.2.10.1
 又は敵意 [sg.]。 KS 1.2 (1.7); MS 1.1.2 (1.5) / KS 1.4 (2.9); MS 1.1.4
 (2.16) / KS 1.5 (2.21)=KapS 1.5 (5.3); MS 1.1.6 (3.11) / KS 1.6
 (3.8)=KapS 1.6 (5.10); MS 1.1.7 (4.1-2) / KS 1.7 (3.15); MS 1.1.8
 (4.8) / KS 1.8 (4.6) / KS 1.10 (5.14); MS 1.1.11 (6.12) / KS 31.4
 (5.5-6, 11-12.18-19)=KapS 47.4 (287.21; 288.4, 11-12); MS 4.1.7
 (9.1) / KS 31.5 (6.4)=KapS 47.5 (288.16) / KS 31.6 (6.17)
 (d) 争い (mrdh)、破壊力 (nāṣtra)。
 KS 7.10 (72.6)=KapS 5.9 (57.19) / KS 37.8 (88.17-18)
 苦痛 (āmīvā)。 KS 2.15 (21.14); MS 4.11.2 (167.12)
 無知達 (acit) [pl.]。 KS 23.11 (87.4)
 (e) 憎しみ達 (dvēṣ) [pl.]。 TS 6.3.2.2⇒後出 4-3
 (dvīṣ) [pl.]。 KS 38.12 (114.15)⇒後出 4-3

[3] 敵対する存在

- (a) 敵 (bhrātr̥vya)。 KS 24.4 (93.7-8)=KapS 37.5 (198.10-11)⇒後出
 4-2; KS 25.9 (115.16)=KapS 40.2 (222.10-11)⇒後出 4-2; KS 25.10
 (117.18-118.2)=KapS 40.3 (224.12-13); KS 26.5 (127.10-11)=
 KapS 41.3 (237.21)
 神々とアスラ達の関係に、祭主と敵、更にラクシャス達の関係が対応
 する。 KS 19.2 (1.12-2.1)=KapS 29.8 (136.6-7) / KS 31.9 (11.13-14)

=KapS 47.9 (263.6-7)

神々とラクシャス達の関係に、祭主と敵の関係が対応する。

TS 2.4.1.3

水はラクシャスを殺すもの。水はヴァジュラ。ヴァジュラを敵に投げつける。KS 31.3 (4.3)=KapS 47.3 (286.8-19)

(b) 敵意を抱く者 (yo arātīyāti)。KS 2.5 (11.5)⇒後出 4-2; KS 2.12 (17.2-3)⇒後出 4-2; MS 1.2.10 (19.16); 3.8.8 (106.2)⇒後出 4-2

(c) 我々を憎む者と我々が憎む者。(yò 'smán dvēṣṭi yāṃ ca vayāṃ dviṣmā)。TS 6.1.8.4; 6.2.10.2; 6.3.9.2⇒後出 4-1

[4] その他

prāheti (飛び道具)。TS 4.4.3.1; KS 17.9 (251.23)=KapS 26.8 (110.5); MS 2.8.10 (114.15)

[4] は飛び道具としてのラクシャスが敵に属しているのではなく、憎む相手に対する武器として扱われている点が特殊である。[1] に挙げられたものたちは RV からの流れを受け継いでおり、また、3 で見てきたような悪霊的なイメージに通じるものがある。ただ、これらの存在とラクシャスとが同一なのか或いは別物を同種の物として並べているだけなのかははっきりとしない。[2] の (a) (b) (c) の抽象名詞は全て否定的感情である。これらの語はマントラ中に出てくるもので、ブラーフマナ部分の解釈においてはじめてラクシャスに言い換えられている点が注目される⁵⁵。しかし、[2] の (d) は争い、破壊力等とラクシャス達を並べているのみで、その

⁵⁵ ...vyāsyān viśvā āmatīr ārātīr ity āha rākṣasām āpāhatyai (TS 5.1.5.9)

「全ての無思慮達と敵意達を投げ捨てて」と唱える。ラクシャス達の排除の為に。

apāmatīm durmatīm bādhamānā ity āha rākṣasām āpāhatyai (TS 5.4.6.2)

「無思慮、悪意を追い払いつつ」と唱える。ラクシャス達の排除の為に。

pārīlikhitāṃ rākṣaḥ pārīlikhitā ārātaya ity āha rākṣasām āpāhatyai || 3 ||

(TS 6.1.8.3; 6.2.10.1)

「ラクシャスは囲まれた。敵意達は囲まれた」と唱える。ラクシャス達の排除の為に。

関係は不明である⁵⁶。それに比べて、[3] の敵対する存在との関係は、一層直接的であるという印象を受ける。中でも、yò 'smán dvēṣṭi yāṃ ca vayāṃ dviṣmá (我々を憎む者と我々が憎む者) とラクシャスを結び付けている [3] の (c) は、より具体的であるという点において注目に値する。それ故、以下では①TS 6.1.8.3-4 ②TS 6.2.10.1-2 ③TS 6.3.9.2-3 の3箇所を中心に検討する。その際、これらの中に取り上げられているマントラ ((1m) TS 1.2.5.1 (2m) TS 1.3.1.1 (3m) TS 1.3.9.2) との関係を示し、次にこれら3箇所に対応する他のテキストとの比較を行う。最後に yò 'smán dvēṣṭi yāṃ ca vayāṃ dviṣmá というマントラを含む他の箇所を概観し、その際に [2] の (e) も検討する。

4-1. TS の問題の箇所とそこに取り上げられているマントラ

①TS 6.1.8.3-4⁵⁷

... yád adhvaryúr anagnáv áhutim juhuyád andhò 'dhvaryúḥ syád rákṣāṃsi yajñāṃ hanyur híraṇyam upásya juhoty agniváty evá juhoti nándhò 'dhvaryúr bhavati ná yajñāṃ rákṣāṃsi ghnanti kânḍe-kânḍe vai kriyámāṇe yajñāṃ rákṣāṃsi jighāṃsanti párilikhitaṃ rákṣaḥ párilikhitā árātaya ity āha rákṣasām ápahatyai || 3 || idám ahám rákṣaso grīvá āpi kṛntāmi yò 'smán dvēṣṭi yāṃ ca vayāṃ dviṣmá ity āha dvaú vāvá púruṣau yāṃ caivá dvēṣṭi yás cainam

⁵⁶ sa stutas sarvā mṛdhas sarvā nāṣṭrās sarvāṇi rákṣāṃsy atarat

(KS 7.10 (72.9)=KapS 5.9 (57.19) / KS 37.8 (88.17-18))

その讃えられた (インドラ) が全ての争い (mṛdh)、破壊力 (nāṣṭra)、ラクシャス達を克服した。

⁵⁷ (1m) TS 1.2.5.1 ソーマ用の牛の足跡の周囲に線を引く際に唱えられる。

ḥpṛthivyás tvā mūrdhān ā jigharmi devayájana idāyāḥ padé ghṛtāvati svāhā |
ḍpárilikhitaṃ rákṣaḥ párilikhitā árātaya idám ahám rákṣaso grīvá āpi kṛntāmi |^eyò 'smán dvēṣṭi yāṃ ca vayāṃ dviṣmá idám asya grīváḥ || 1 || āpi kṛntāmi |

私は大地の頭に汝を注ぐ、祭式の場所にて、イダーの液状バターのしたたる足跡にて。スヴァーハー。ラクシャスは囲まれた。敵意達は囲まれた。このように私はラクシャスの首を刎ねる。我々を憎む者と我々が憎む者、その者の首をこのように私は刎ねる。

dvēṣṭi tāyor evānantarāyaṃ grīvāḥ kṛntati

(3) ……もしアドヴァリウ祭官が祭火の無い所で供物を捧げるなら、アドヴァリウ祭官は盲目になるだろう。ラクシャス達は祭式を破壊するだろう。黄金を下に置いて献供する。即ち、祭火のある所で献供する。アドヴァリウ祭官は盲目にならない。ラクシャス達は祭式を破壊しない。各部分が行われる度に、ラクシャス達が祭式を破壊しようとする。「ラクシャスは囲まれた。敵意達は囲まれた」と唱える。ラクシャス達の排除の為。

(4) 「このように私はラクシャスの首を刎ねる。我々を憎む者と我々が憎む者」と唱える。2人のヒト、即ち、彼が憎む者と彼を憎む者、その者達の首を一気に刎ねる。

②TS 6.2.10.1-2⁵⁸

devāsya tvā savitūḥ prasavā ity ābhrim ā datte prāsūtyā aśvīnor bāhūbhyām ity āhāśvīnau hī devānām adhvaryū āstām pūṣṇó hāstābhyām ity āha yātyai vājra iva vā eṣā yād ābhir ābhir asi nārīr asīty āha śāntyai kāṇḍe-kāṇḍe vai kriyāmāṇe yajñāṃ rākṣāṃsi jighāṃsanti pārilikhitaṃ rākṣaḥ pārilikhitā ārātaya ity āha rākṣasām āpātyai || 1 || idām ahām rākṣaso grīvā āpi kṛntāmi yò 'smān dvēṣṭi yām ca vayām dviṣmā ity āha dvaū vāvā pūruṣau yām caivā dvēṣṭi yās cainām dvēṣṭi tāyor evānantarāyaṃ grīvāḥ kṛntati divē tvāntārik-

⁵⁸ (2m) TS 1.3.1.1 小屋 (sadas) を建てる前に周囲に線を引く際に唱えられる。

^adevāsya tvā savitūḥ prasavē 'śvīnor bāhūbhyām pūṣṇó hāstābhyām ā dadē 'bhrir asi nārīr asi | ^bpārilikhitaṃ rākṣaḥ pārilikhitā ārātaya idām ahām rākṣaso grīvā āpi kṛntāmi | ^cyò 'smān dvēṣṭi yām ca vayām dviṣmā idām asya grīvā āpi kṛntāmi | ^ddivē tvāntārikṣāya tvā pṛthivyai tvā | ^esūndhatām lokāḥ pitṛśādano | ^fyāvo 'si yavāyāsmād dvēṣaḥ || 1 || yavāyārātīḥ |

サヴィトリ神の鼓舞のもと、アシュビン双神の両腕によって、プーシャンの両手によって、私は汝を取る。汝はくわである。汝は女である。ラクシャスは囲まれた。敵意達は囲まれた。このように私はラクシャスの首を刎ねる。我々を憎む者と我々が憎む者、その者の首をこのように私は刎ねる。天に、汝を。中空に、汝を。大地に、汝を。祖霊達が坐している世界が清浄であれ。汝は大妻である。私達から憎しみを排除せよ。私達から敵意達を排除せよ。

śāya tvā pṛthivyāi tvéty āhaibhyā evāinaṃ lokébhyaḥ prókṣati parástād arvácim prókṣati tasmāt || 2 || parástād arvácim manuṣyā ūrjam úpa jīvanti

(1) 「サヴィトリ神の鼓舞のもと汝を」と唱えつつ、くわを取る。鼓舞の為に。「アシュビン双神の両腕によって」と唱える。アシュビン双神は神々のアドヴァリユウ祭官であったので。「プーシャンの両手によって」と唱える。支え持つ為に。くわであるこれは実にヴァジュラの如くである。「汝はくわである。汝は女である」と唱える。静めの為に。各部分が行われる度に、ラクシャス達が祭式を破壊しようとする。「ラクシャスは囲まれた。敵意達は囲まれた」と唱える。ラクシャス達の排除の為。

(2) 「このように私はラクシャスの首を刎ねる。我々を憎む者と我々が憎む者」と唱える。2人のヒト、即ち、彼が憎む者と彼を憎む者、その者達の首を一気に刎ねる。「天に、汝を。中空に、汝を。大地に、汝を」と唱える。即ち、これらの諸世界の為にそれ（くわ）に水をかける。上からこちら側に向けて水をかける。それ故、人間は上からこちら側に向かって活力に拠って生きる。

③TS 6.3.9.2-3⁵⁹

pārśvatá ā chyati madhyató hí manuṣyā āchyánti tiraścīnam ā chyaty

⁵⁹ (3m) TS 1.3.9.1-2 犠牲獣の腸間膜を切り取って出た血に浸した草の切れ端を投げる際に唱えられる。

°śám adbhyāḥ || 1 || sám ośadhībhyāḥ sám pṛthivyāi sám áhobhyām | °śadhe trāyasvainam | °svádhite maīnam hiṃsī | °hrákṣasām bhāgō 'sī | °dám ahám rákṣo 'dhamam támo nayāmi | °kyō 'smán dvéṣṭi yām ca vayām dviṣmá idám enam adhamām támo nayāmī | °śé tvā | °mghṛténa dyāvāpṛthivī prórṇvāthām | °āchinno ráyāḥ suvra | °urv antárikṣam ánv ihi | °vāyo ví 'hi* stokánām svāho | °rdhvánabhasam mārutām gachatam || 2 ||

(2) 水に幸あれ。植物達に幸あれ。大地に幸あれ。昼夜に幸あれ。植物よ、彼を守護せよ。斧よ、彼を傷つけるな。汝はラクシャス達の分け前である。このように私はラクシャスを最も低い闇に導く。我々を憎む者と我々が憎む者、その者を私はこのように最も低い闇に導く。食物の為に、汝を。天地よ、液状バターで覆われよ。切られておらず、英雄的で、富を。汝は広大なる中空に沿って行け。ヴァーユよ、雲達を喜んで受け取れ。スヴァーハー。雲の上にあるマルト達に関わるものに、汝

anūcīnaṁ hī manuṣyā āchyānti vyāvṛṭtyai rākṣasām bhāgò 'sīti sthavitatò
barhīr aktvāpāsyaty asnaivā rākṣāṁsi nirāvadayata idām ahām rākṣo
'dhamām tāmo nayāmi yò 'smān dvēṣṭi yām ca vayām dviṣmā ity āha dvaū
vāvā pūruṣau yām caivā || 2 || dvēṣṭi yās cainaṁ dvēṣṭi tāv ubhāv adhamām
tāmo nayati ...

(2) 側面から（犠牲獣の皮に）切れ込みを入れる。人々は真ん中から切れ込みを入れるので。横に切れ込みを入れる。人々は縦に沿って切れ込みを入れるので。区別の為に。「汝はラクシャス達の分け前である」と唱えつつ、（1本の）敷き草の太い方に塗ってそれを投げる。即ち、血でラクシャス達を納得させる。「このように私はラクシャスを最も低い闇に導く。我々を憎む者と我々が憎む者」と唱える。

(3) 2人のヒト、即ち、彼が憎む者と彼を憎む者、その両方とも彼は最も低い闇に導く。……

問題の箇所とそこに取り上げられているマントラの関係は以下の通りである。

(1m) TS 1.2.5.1, (2m) TS 1.3.1.1 idām ahām rākṣaso grīvā āpi kṛntāmi
| yò 'smān dvēṣṭi yām ca vayām dviṣmā idām asya grīvā āpi kṛntāmi
このように私はラクシャスの首を刎ねる。我々を憎む者と我々が憎む者、その者の首をこのように私は刎ねる。

↓↓↓

①TS 6.1.8.4, ②TS 6.2.10.2 idām ahām rākṣaso grīvā āpi kṛntāmi yò
'smān dvēṣṭi yām ca vayām dviṣmā ity āha dvaū vāvā pūruṣau yām caivā
dvēṣṭi yās cainaṁ dvēṣṭi tāyor evānantarāyām grīvāḥ kṛntati

(4) 「このように私はラクシャスの首を刎ねる。我々を憎むものと我々が憎むもの」と唱える。2人のヒト、即ち、彼が憎む者と彼を憎む者、

ら2人は行け。

* vihi と一語に取る。Cf. Keith.-1 [1967], p. 45, n. 3. Weber [1873], p. 68-69.

その者達の首を一気に刎ねる。

(3m) TS 1.3.9.2 idám ahám rákṣo 'dhamám támo nayāmi | yò 'smán dvéṣṭi yám ca vayám dviṣmá idám enam adhamám támo nayāmi

このように私はラクシャスを最も低い闇に導く。我々を憎む者と我々が憎む者、その者を私はこのように最も低い闇に導く。

↓↓↓

③TS 6.3.9.2-3 idám ahám rákṣo 'dhamám támo nayāmi yò 'smán dvéṣṭi yám ca vayám dviṣmá íty āha dvaú vāvá púruṣau yám caivá || 2 || dvéṣṭi yás cainam dvéṣṭi táv ubhāv adhamám támo nayati

「このように私はラクシャスを最も低い闇に導く。我々を憎むものと我々が憎むもの」と唱える。

(3) 2人のヒト、即ち、彼が憎む者と彼を憎む者、その両方とも彼は最も低い闇に導く。

本来のマントラは2つであり、首を跳ねる、或いは闇に導く対象であるラクシャスと yò 'smán dvéṣṭi yám ca vayám dviṣmá の関係は不明である。それに対して問題の箇所では、2つのマントラが1つにされ、ラクシャスと yò 'smán dvéṣṭi yám ca vayám dviṣmá があたかも同一であるかのように改変され、更に後者を説明して2人のヒトと言い換えられている。

この様な例は他にあるのかどうか、次にこれらのTSの箇所に対応する他のテキストを検討する。

4-2. ①TS 6.1.8.3-4 ②TS 6.2.10.1-2 ③TS 6.3.9.2-3⁶⁰に対応する他のテキスト

①KS 24.4 (93.4-18)=Kap S 37.5 (198.8-21)⁶¹

②KS 25.9 (115.14-18)=KapS 40.3 (224.11-13); ②MS 3.8.8 (105.17-106.4)

⁶⁰ KS には対応箇所がない。MS の対応箇所 (MS 3.10.2) には問題の表現がない。

⁶¹ MS の対応箇所 (MS 3.7.7 (83.11-84.4)) には問題の表現がない。

①KS 24.4 (93.4-18)=Kap S 37.5 (198.8-21)⁶²

...pṛthivyās tvā mūrdhān ājigharmi devayājana⁶³ ity eṣā hī pṛthivyā mūrdhā yād devayājanam iḍāyās padé ghṛtāvati svāhétīdā vā eṣā tāsyā etād ghṛtāvati padām svāhākārēṇaivainām yacchatīdām ahām rākṣaso grīvā āpikṛntāmīti bhrātrvyo vai rākṣo bhrātrvyasyaivā grīvā āpikṛntati sphyéna padām párilikhati vājro vai sphyaḥ paśávaḥ padām vājreṇaivásmai paśún párigṛhṇāti⁶⁴ yávad ghṛtām vidhāvet távad abhipárilikhet paśávo vai ghṛtām paśún evávarunddhe⁶⁵ sthālyām padām sámṇvapaty ādityā vai paśávaḥ pṛthivy áditiḥ pṛthivyās sthālī sámhbṛtā svā evainān yónau dadhāty asmé ramasvāsmé te ráya iti yāt tvé ráya iti brūyád itarasmai paśún sampráyacched adhvaryúr apaśús syān mé ráya ity ātmān evā paśún yacchate || vyṛddhā vā eṣāhutih yām anagnaú juhóti yád dhiraṇyam upāsya juhóty agnimáty evā juhóti sámrdhyā anagnaú vā etām áhutih juhóti tām ísvarāṇi rākṣāṃsy anūdāyya hāntor yád apó nináyati⁶⁶ śāntyā evā rākṣasām apahatyā* ayonín vā etād

⁶² マントラ対応箇所 (1m) KS 2.5 (11.3-7)=KapS 1.18 (13.12-14)

pṛthivyās tvā mūrdhān ājigharmi devayājana iḍāyās padé ghṛtāvati svāhedām ahām rākṣaso grīvā āpikṛntāmīdām ahām yó nas samānó yó 'samāno 'rātīyāti tasya grīvā āpikṛntāmy* asmé ramasvāsmé te ráyo mé ráyas táva táva ráyo** máhām ráyās pōṣeṇa víyoṣaṃ (KS 2.5 (11.3-7))

私は大地の頭にて汝に注ぐ、祭式の場所にて、液状バターのあるイダーの足跡にて。スヴァーハー。このように私はラクシャスの首を刎ねる。このように私達と同等の者でも同等でない者でも、敵意を抱く者、その者の首を私は刎ねる。汝は我々に宿れ、我々に、汝の富が。私に、汝の富が。汝の富が。私が富の増大から離れないように。

* KapS には “idām ahām yó nas samānó yó 'samāno 'rātīyāti tasya grīvā āpikṛntāmy” はない。

** KapS には “táva táva ráyo” はない。

⁶³ KapS には devayājana はない。

⁶⁴ KapS には “sphyéna padām párilikhati vājro vai sphyaḥ paśávaḥ padām vājreṇaivásmai paśún párigṛhṇāti” はない。

⁶⁵ KapS では “yávad ghṛtām vidhāvet távad abhipárilikhet paśávo vai ghṛtām paśún evávarunddhe” は*の後に来る。

⁶⁶ KapS では “yád apó nináyati” の代わりに “yat parijuhóti”。

paśūñ chucārpayati yád eṣāṃ padām parikhāyāhārati yád apó nináyati paśūn evá śucó muñcati...

……「私は大地の頭に汝を注ぐ、祭式の場所にて」と唱える。祭式の場所とは大地のこの頭なので。「イダーの液状バターのしたたる足跡にて。スヴァーハー」と唱える。これがイダーである。これが彼女の液状バターのある足跡。他ならぬスヴァーハーという語と共にこれを捧げ持つ。「このように私はラクシャスの首を刎ねる」と唱える。ラクシャスは実に敵。即ち、彼は敵の首を刎ねる。木剣で足跡の周囲に線を引く。木剣は実にヴァジュラ。足跡は動物達。即ち、ヴァジュラで彼の為に動物達を囲む。液状バターが流れ出しただけの周囲に線を引くべし。液状バターは実に動物達。即ち、動物達を獲得する。土鍋に足跡（の土を）集め入れる。動物達は実にアーディティア達。アディティは大地。土鍋は大地から集められた。即ち、自身の母胎にそれら（動物達）を置く。「汝は我々に宿れ。我々に。汝の富が」と唱える。もしも「汝に、富が」と唱えるなら、他者に動物達をすっかり与えることになる。アドヴァリユウ祭官は家畜を持たない者となるだろう。「我に、富が」と唱える。即ち、自身に家畜達を保持する。彼が祭火の無い所で献供すると、この献供はうまくいかない。黄金を下に置いて献供することで、即ち、祭火のある所で献供することになる。うまくいくように。実に祭火の無い所でこの供物を献供する。ラクシャス達が出てきてそれを損なう可能性がある。水を注ぐのは、即ち、鎮めの為、ラクシャス達の排除の為。これらの足跡の周りを掘って持って来ることで、実に母胎を持たない動物達にこの様に痛みを齎すことになる。水を注ぐことで、即ち、動物達を痛みから解放することになる。……

②KS 25.9 (115.14-18)=KapS 40.3 (224.11-13)⁶⁷

...devasya tvā savitūḥ prasava ity abhrim ādatte savitṛprasūta evainām⁶⁸

⁶⁷ マントラ対応箇所 (2m) KS 2.12 (17.1-5)=KapS 2.6 (18.9-11)

devāsya tvā savitūḥ prasavē 'śvīnor bāhūbhyām pūṣṇó hástābhyām ādāta idām ahām rākṣaso grīvā āpikṛntāmīdām ahām yó nas samāno yó 'samāno 'rātīyāti tāsya grīvā āpikṛntāmi* divē tvāntāriḥśāya tvā pṛthivyai tvā sūndhantām lokāḥ pitṛśadanā yāvo 'si

devatābhir ādatta idam ahaṃ rakṣaso grīvā apikṛntāmīti bhrātrvyo vai rakṣo
bhrātrvyasyaiva grīvā apikṛntatīdam ahaṃ yo nas samāno yo 'samāno
'rātīyati tasya grīvā apikṛntāmīti ॥

「サヴィトリ神の鼓舞のもと汝を」と唱えつつ、くわを取る。即ち、サヴィトリに鼓舞されて諸神格と共にそれを取る。「このように私はラクシャスの首を刎ねる」と唱える。ラクシャスは実に敵。即ち、敵の首を刎ねる。「このように私達と同等の者でも同等でない者でも、敵意を抱く者、その者の首を私は刎ねる」と唱える。

②MS 3.8.8 (105.17-106.4)⁶⁹

devāsya tvā savitūḥ prasavā itī savitṛprasūta evainām ādatte 'śvīnor
bāhūbhyām ity aśvīnau vai devānām adhvaryūḥ pūṣṇó hāstābhyām itī
devatābhir evābhrir asi nārīr asīti krūrām iva vā etād yād ābhriḥ śamāyaty

yāvāyāsmād** dvēṣo*** yāvāyārātim**** (KS 2.12 (17.1-5))

サヴィトリ神の鼓舞のもと、アシュビン双神の両腕によって、プーシャンの両手によって、私は汝を取った。このように私はラクシャスの首を刎ねる。このように私達と同等の者でも同等でない者でも、敵意を抱く者、その者の首を私は刎ねる。天に、汝を。中空に、汝を。大地に、汝を。祖霊達が坐している諸世界が清浄であれ。汝は大麥である。私達から憎しみを排除せよ。敵意を排除せよ。

* KapS には “idām ahaṃ yō nas samāno yō 'samāno 'rātīyati tasya grīvā apikṛntāmy” はない。

** KapS では yāvāyāsmād。

*** Mittwede [1989], p. 45. Schroeder: dvēṣam.

**** KapS では yāvāyārātim。

⁶⁸ Mittwede [1989], p. 122. Schroeder: evainām

⁶⁹ マントラ対応箇所 (2m) MS 1.2.10 (19.14-16)

devāsya tvā savitūḥ prasavē 'śvīnor bāhūbhyām pūṣṇó hāstābhyām ādadē 'bhrir asi
nārīr asīdām ahaṃ rākṣaso grīvā apikṛntāmīdām ahaṃ yō me samāno yō 'samāno
'rātīyati tasya grīvā apikṛntāmi (MS 1.2.10 (19.14-16))

サヴィトリ神の鼓舞のもと、アシュビン双神の両腕によって、プーシャンの両手によって、私は汝を取った。汝はくわである。汝は女である。このように私はラクシャスの首を刎ねる。このように私と同等の者でも同等でない者でも、敵意を抱く者、その者の首を私は刎ねる。

evédám ahám rákṣaso grīvā ápiḱṛntāmīty āha rákṣasām dhvaráyai rákṣasām
 antárityā idám ahám yó me⁷⁰ samāmó yó 'samāno 'rātīyāti tásya grīvā
 ápiḱṛntāmīti samāno vá hy ásamāno vārātīyāti sárvam evaitáyā páryāpat...
 「サヴィトリ神の鼓舞のもと汝を」と唱える。即ち、サヴィトリに鼓舞さ
 れてそれを取る。「アシュビン双神の両腕によって」と唱える。アシュビ
 ン双神は実に神々のアドヴァリユウ祭官。「プーシャンの両手によって」
 と唱える。即ち、諸神格と共に。「汝はくわである。汝は女である」と唱
 える。くわなるこれは実に苛烈であるが如くなので。即ち、鎮めるのであ
 る。「このように私はラクシャスの首を刎ねる」と唱える。ラクシャス達
 を落とす為に。ラクシャス達を遮る為に。「このように私と同等の者でも
 同等でない者でも、敵意を抱く者、その者の首を私は刎ねる」と唱える。
 等しくても等しくなくても敵意を持つので。即ち、これによって全てに達
 したのだ⁷¹。

TS の問題の箇所に対応する他のテキストとそこに取り上げられている
 マントラとの関係は以下の通りである。

(1m) KS 2.5 (11.4-6), (2m) KS 2.12 (17.2-3) idám ahám rákṣaso grīvā
 ápiḱṛntāmīdám ahám yó nas samāno yó 'samāno 'rātīyāti tasya grīvā
 ápiḱṛntāmi

このように私はラクシャスの首を刎ねる。このように私達と同等の者
 でも同等でない者でも、敵意を抱く者、その者の首を私は刎ねる。

↓↓↓

①KS 24.4 (93.7-9)=KapS 37.5 (198.10-12), ②KS 25.10 (115.16-17)=
 KapS 40.3 (224.12-13)

idam aham rakṣaso grīvā apikṛntāmīti bhrātrvyo vai rakṣo bhrātr-

⁷⁰ Mittwede, M. [1986], p. 134. Schroeder: sóme.

⁷¹ 敵意を持つ人全てに効果が行き渡るものとなったことを意味する。

vyasyaiva grīvā apikṛntati

「このように私はラクシャスの首を刎ねる」と唱える。ラクシャスは
実に敵。即ち、敵の首を刎ねる。

(2m) MS 1.2.10 (19.15-16) idám ahám rákṣaso grīvā ápikṛntāmīdám
ahám yó me samāno yó 'samāno 'rātīyāti tāsya grīvā ápikṛntāmi
このように私はラクシャスの首を刎ねる。このように私と同等の者でも
同等でない者でも、敵意を抱く者、その者の首を私は刎ねる。

↓↓↓

②MS 3.8.8 (106.1-4) idám ahám rákṣaso grīvā ápikṛntāmīty āha
rákṣasām dhvarāyai rákṣasām antārityā idám ahám yó me samāno yó
'samāno 'rātīyāti tāsya grīvā ápikṛntāmīti samāno vá hy asamāno vārātīyāti
sārvam evaitāyā páryāpat

「このように私はラクシャスの首を刎ねる」と唱える。ラクシャス達を
落とす為。ラクシャス達を遮る為。「このように私と同等の者でも同等
でない者でも、敵意を抱く者、その者の首を私は刎ねる」と唱える。等
しくても等しくなくても敵意を持つので。即ち、これによって全てに達
したのだ。

問題箇所に対応する他のテキストには yò 'smán dvēṣṭi yám ca vayám
dviṣmá という表現はない。代わりに、KS, KapS ではラクシャスを敵
(bhrātrvya) と等置する。KS と MS のマントラは、idám ahám rákṣaso
grīvā ápikṛntāmi の後が idám ahám yó nas samāno yó 'samāno 'rātīyāti tāsya
grīvā ápikṛntāmi となっており、MS 3.8.8 はそれら 2 つを別箇に説明して
いる。

以上のことから、yò 'smán dvēṣṭi yám ca vayám dviṣmá というマントラ
を取り上げ、更にそれをラクシャスと結びつけているのは TS のみである
ことが明らかになった。

では、yò 'smán dvēṣṭi yám ca vayám dviṣmá というマントラを含む他の
箇所にはどのような記述が見られるであろうか。

4-3. *yò 'smān dvēṣṭi yām ca vayām dviṣmās...*, 或いは *yām dviṣmó yās ca no dvēṣṭi...* というマントラを含む箇所

殆どの場合、その相手が何者であるか言及されておらず、稀に、敵 (*bhrátrvya*, TS 3.5.3.1; MS 4.1.10 (13.4)) や競争をしている相手 (MS 1.5.11 (79.19-80.4)) と見なされている。

TS 1.1.9.1-2 にはアラル (ŚB 1.2.4.17 によればアスラ・ラクシャスの名) が言及されるが、同様にアラルの名が見られる MS 1.1.10 (6.3-8) や ŚB 1.2.4.16-17 に比べて、このマントラとアラルへの言及箇所が近接しているという特徴が認められるにとどまる。

また、[2] の (e) にあげた TS 6.3.2.2 にはこのマントラは見られないが、憎しみ達をラクシャス達と同一視しようとする解釈の仕方に、先の TS の 3 箇所との共通点が見られる⁷²。

TS 6.3.2.2⁷³

vaisarjanāni juhōti rākṣasām āpahatyai tvām soma tanūkṛdbhya⁷⁴ ity āha

⁷² [2] の (e) のもう 1 つの KS 38.12 では、憎しみ達とラクシャス達との関係は不明である。

pāri prāgād devō agni rākṣohāmīvacātanaḥ |

sédhan víśvā āpa dvīṣo dáhan rākṣāmsi víśvāhā || (KS 38.12 (114.14-15))

ラクシャス殺しで、苦痛を取り除くものである、神アグニは、一切の憎しみ達を遠ざけつつ、常にラクシャス達を焼きつつ、周囲を進んでいったのだ。

⁷³ ここで扱っているマントラは

tvām soma tanūkṛdbhyo dvēṣobhyo 'nyākṛtebhya urú yantāsi várūthaṁ svāhā | juṣāṇō aptúr ājyasya vetu svāhā | (TS 1.3.4.1a=RV 8.79.3)

汝は、ソーマよ、自ら作り出した、他者により作られた、憎しみからの、広大な守護を与える者である、スヴァーハー。活発な者は喜んで液状バターの（一部を）取れ、スヴァーハー。

⁷⁴ *tanūkṛt* という語が何を意味するかは不明であるが、ここでは Keith に従い、*anyākṛta* の対になる語として *making by oneself* と取る。Cf. Keith [1967], -1, p. 39, n. 12; -2, p. 515, n. 6.

しかしその訳や解釈は学者によって様々に分かれる。

tanūkṛd dhy eṣá dvēṣobhyo 'nyākṛtebhya ity āhānyākṛtāni hī rākṣāṃsy urú
yantāsi várūtham ity āhorū ṇas kṛdhīti vāvaitād āha juṣāṇō aptūr ājyasya
vetv ity āhāptūm evā yājamānaṃ kṛtvā suvargām lokām gamayati rākṣasām
ānupalābhāya || 2 ||

(2) 次に vaisarjana（ソーマ祭の第3 upasadで行われる ājya 献供）をする。ラクシャス達の排除の為。「汝は、ソーマよ、自ら作り出したもの達からの」と唱える。この者（ソーマ）が自ら作り出すものなので。「他者により作られた憎しみ達からの」と唱える。ラクシャス達は他者により作られたので。「汝は広大な守護を与える者である」と唱える。「我々の為に広大にせよ」と実際このように言う。「活発な者は喜んで液状バターの（一部を）取れ」と唱える。即ち、祭主を活発な者にして天界へ行かせる。ラクシャス達が捕まえないように。

ここで取り上げられているマントラとの関係は以下の通りである。

TS 1.3.4.1a⁷⁵=Rg Veda (RV) 8.79.3

tvām soma tanūkṛdbhyo dvēṣobhyo 'nyākṛtebhya ... |

汝は、ソーマよ、自ら作り出した、他者により作られた憎しみ達からの

.....

↓↓↓

Geldner は tanūkṛdbhyo を Dativ と取り、(deinen) leiblichen Erzeugern と訳している。Cf. Geldner [1951], p. 406.

Eggeling は ŚB 3.6.3.7 で life-injuring と訳しているが、body making, from the enemies that assume (various) forms との可能性も示唆している。Cf. Eggeling [1988], p. 157, n. 2.

Mayrhofer (EWAia) 'selbstbereitet',

Oldenberg 'den (Frommen), die tätig sind sich die eigne tanū zu schaffen'. Cf. Oldenberg. [1912], pp. 139-140.

Scarlata 'für die, die {deinen} Leib (=dich) zubereiten'. Cf. Scarlata [1999], p. 73.

⁷⁵ ソーマ祭において、アドヴァリユウ祭官が Śālamukhīya 祭火で供物を作る場面に立ち会う際に唱える。

TS 6.3.2.2

tvāṁ soma tanūkṛdbhya ity āha tanūkṛd dhy eṣā dvēṣobhyo 'nyākṛtebhya
ity āhānyākṛtāni hī rākṣāṁsi

「汝は、ソーマよ、自ら作り出したもの達からの」と唱える。この者（ソーマ）が自ら作り出すものなので、「他者により作られた (anyākṛta) 憎しみ達からの」と唱える。ラクシャス達は他者により作られたので。

対応箇所は、KS 26.2; KapS 40.5; MS 3.9.1 で、このうち件のマントラを扱っているのは MS である。

MS 3.9.1 (112.8-9)

tvāṁ soma tanūkṛdbhya⁷⁶ iti yād evā tanúkṛtaṁ cānyākṛtaṁ caīnas tād
 etēnāvayajati

「汝は、ソーマよ、自ら作り出したもの達からの」と唱えつつ、自ら作り出された、また、他者により作り出された害悪をこれにより祭式を行うことで取り除く。

MS 3.9.1 (112.8-9) では tanūkṛdbhya dvēṣobhyo 'nyākṛtebhya を yād evā tanúkṛtaṁ cānyākṛtaṁ caīnas 「自ら作り出された、また、他者により作り出された害悪を」と解釈しているが、それに対して、TS 6.3.2.2 では tanūkṛdbhya dvēṣobhyo 'nyākṛtebhya を 2 つに分け、前半をソーマに結び付け、後半をラクシャスに結び付けるという解釈が施されている。

以上見てきた様に、TS 6.1.8.3-4; 6.2.10.1-2; 6.3.9.2-3 では、本来 2 つであるマントラが 1 つにされ、祭主と憎しみ合う関係にある人間とラクシャスとがあたかも同一であるかのように解釈されたが、他のテキストの対応

⁷⁶ MS 1.2.13 (22.3) では TS や RV と同様に tanūkṛt. Cf. Wackernagel [1954-75], vol. III, p. 195. (2 行目の MS 3.9.6 は MS 3.9.1 の間違い)。

箇所にはこの様な解釈は見られなかった。但し、KS, KapS ではラクシャスを敵と等置している。

また、*yò 'smán dvēṣṭi yām ca vayām dviṣmās...*、或いは *yām dviṣmó yās ca no dvēṣṭi...* というマントラを含む他の箇所では、直接ラクシャスが結びつくことはない。

ラクシャス達を憎しみ達と等置している TS 6.3.2.1-2 は、本来1つのマントラを2つに分け、「他者により作られた (*anyākṛta*) 憎しみ達から」を、ラクシャス達は他者により作られたので、と説明している。

これらのことから、黒ヤジュル・ヴェーダ・サンヒターのプラーフマナ部分においては *ārātayas* (敵意達—好意的でない) や *āmatayas* (無思慮達—考慮しない) といった感情がラクシャスに言い換えられている点が注目されるが、その繋がりはいまいである。その中で、ラクシャス達を憎み合う関係にある人間或いは憎しみををはっきりと結び付けようとする TS は、他のテキストと比較して特異な立場を打ち出していると言えよう。

5. まとめ

ラクシャスの記述に関する黒ヤジュル・ヴェーダ・サンヒターの特徴は、以下の3点にまとめることができる。

(1) ラクシャスの特質や退治法、並立される存在等から浮かび上がるイメージは、具体的であると同時に様々な様相を呈するものであるが、ラクシャスは一種の妖術的な力と見なしうる。そして、疫病や動物、魔物的存在とラクシャスとを並立させる点は、RV から叙事詩やプラーナへ向かう流れに沿ったものであると言える。

(2) ラクシャスと共にあげられる抽象名詞は全て否定的感情であり、マントラ中に出てくるもので、プラーフマナ部分の解釈においてはじめてラクシャスに言い換えられている。

(3) TS は TS 6.1.8.3-4; 6.2.10.1-2; 6.3.9.2-3 に見られる様に、ラクシャスを人や人の否定的感情に直接結びつけようとする傾向にあるという点で注目値する。

(略号表)

- EWAia *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*, Heidelberg.
- KEWA *Kurzgefaßtes etymologisches Wörterbuch des Altindischen*, Heidelberg.
- KapS *Kaṣiṣṭhala-Kaṭha-Saṃhitā, A Text of the Black Yajurveda*, Ed. by Raghu Vira (Meher Chand Lachhman Das Sanskrit and Prakrit Series Vol. 1), Lahore, 1932.
- KS *Kāṭhaka, die Saṃhitā der Kāṭha-Śākhā*, Herausgegeben von Leopold von Schroeder, Wiesbaden, 1971.
- MS *Maitrāyaṇī Saṃhitā, die Saṃhitā der Maitrāyaṇīya-Śākhā*, Herausgegeben von Leopold von Schroeder, Wiesbaden, 1972.
- RV *Ṛgveda with the Padapāṭha and the available portions of the Bhāṣya-s by Skandasvāmin and Udgītha, the Vyākhyā by Venkaṭamādhava and Mudgala's Vṛtti based on Sāyana-bhāṣya*, Part III, Ed. by Vishva Bandhu (V. I. Series-21), Hoshiarpur, 1963.
- ŚB *The Śatapathā Brāhmaṇa in the Mādhyandīna-Śākhā with extracts from the commentaries of Sāyana, Harīsvāmin and Dvivedaganga*, Ed. by Albrecht Weber (The Chowkhamba Sanskrit Series 96), Varanasi, 1964.
- TaiĀ *Kṛṣṇayajurvedīyaṃ Taittirīyāranyakam, Śrīmatasāyanaċāryaviracita-bhāṣyasametam*, (Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ; granthāṅkaḥ 36), Poona, 1898.
- TaiB *Kṛṣṇayajurvedīyaṃ Taittirīyabrāhmaṇam, Śrīmatasāyanaċāryaviracita-bhāṣyasametam*, 3rd ed., (Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ; granthāṅkaḥ 37), Poona, 1979.
- TS *Die Taittirīya-Saṃhitā*, Erster Theil, Herausgegeben von Albrecht Weber (Indische Studien 11), Leipzig, 1871.
Die Taittirīya-Saṃhitā, Zweiter Theil, Herausgegeben von Albrecht Weber (Indische Studien 12), Leipzig, 1872.
The Taittirīyā Saṃhitā of the Black Yajurveda with the commentary of Bhaṭṭa Bhāskara Miśra, Ed. by A. M. Sastri and K. Rangacharya,

参考文献

- Eggeling, J. [1989] *The Śatapatha-Brahmaṇa*, Part III (The Sacred Books of the East 41), Delhi.
[1988] *The Śatapatha-Brahmaṇa*, Part IV (The Sacred Books of the East 43), Delhi.
- Einoo, S. [1985] "Altindische Getreidespeisen.", *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, Heft 44, Teil, pp. 15-27
- Geldner, K. F. [1951], *Der Rig-Veda*, Zweitel Teil, Leipzig.
- Hale, W. E. [1986] *Asura-in Early Vedic Religion*. Delhi.
- Keith, A. B.-1 [1967] *The Veda of the Black Yajus School entitled Taittiriya Saṁhitā* (Harvard Oriental Series 18), Delhi.
- Keith, A. B.-2 [1967] *The Veda of the Black Yajus School entitled Taittiriya Saṁhitā* (Harvard Oriental Series 19), Delhi.
- Lüders, H. [1951] *Varuṇa*, Göttingen.
- Macdonell, A. A. [1995] *Vedic Mythology*, Delhi.
- Mittwede, M. [1986] *Textkritische Bemerkungen zur Maitrāyaṇī Saṁhitā* (Alt- und Neu-Indische Studien 31), Stuttgart.
- Mittwede, M. [1989] *Textkritische Bemerkungen zur Kāṭhaka Saṁhitā* (Alt- und Neu-Indische Studien 37), Stuttgart.
- Oertel, H. [1926] *The Syntax of Cases in the Narrative and Descriptive Prose of the Brāhmaṇas, 1. The Disjunct Use of Cases*, Heidelberg.
- Oertel, H. [1934] *Zur Kapiṣṭhala-Kāṭha-Saṁhitā*, München.
- Oldenberg, H. [1912] *Ṛgveda. Textkritische und exegetische Noten, Siebentes bis zehntes Buch*, Berlin
- Oldenberg, H. [1923] *Die Religion des Veda*, 3. und 4. Auflage, Stuttgart und Berlin. (Tr. into English by Shrotri, S. B., *The Religion of the Veda*, Delhi, 1988).

- Patton, L. L. [2005] *Bringing the Gods to Mind: Mantra and Ritual in Early Indian Sacrifice*, Berkeley · Los Angeles · London.
- Scarlata, S. [1999] *Die Wurzelkomposita im Rg-Veda*, Wiesbaden.
- Venkataraman, T. K. [1940] “The Rakshasas.” In *Professor K. V. Rangaswami Aiyangar commemoration volume*, pp. 187–190. Madras.
- Wackernagel [1954–75], *Altindische Grammatik*, Vols. I–III, Göttingen.
- Weber, A. [1873] *Indische Studien XIII*, Leipzig.
- Whitney, W. D. [1885] *The Roots, Verb-forms and Primary Derivatives of the Sanskrit Language: a Supplement to His Sanskrit Grammar*, Leipzig.

Summary

Rakṣasas in the *Black Yajur Veda Saṃhitās*

Atsuko Izawa

Rakṣasas (*rākṣāṃsi*) appear portrayed in a variety of ways in a wide range of Sanskrit sources stretching from the *Ṛg Veda* to the Epics and the Purāṇas. The term has been understood differently in various texts throughout the ages. Its precise sense is difficult to define, and this explains why the word cannot be easily rendered into any other languages.

My paper deals with the term *rākṣas* in the *Black Yajur Veda Saṃhitās*, and attempts to identify the characteristics attributed to the Rakṣasas, the protective measures one can take against them, and the relations between the Rakṣasas and other beings as well as various mental and abstract states. I then turn my attention to *Taittirīya Saṃhitā* 6.1.8.3-4, 6.2.10.1-2, and 6.3.9.2-3, where a *rākṣas* is defined as 'one who hates us and whom we hate' (*yò 'smān dvéṣṭi yám ca vayám dviṣmā*).

My findings concerning the meaning of the term *rākṣas* in the *Black Yajur Veda Saṃhitās* can be summed up as follows:

(1) It seems that although different senses and usages are found in our sources, there is a basic semantic sphere which underlies all the denotations and connotations associated with the Rakṣasas. In spite of its vagueness, I would define this sphere as referring to 'evil (magical) influences'. And the fact that the term *rākṣas* often collocates with diseases, animals, and demonic beings suggests that it follows a similar tradition.

(2) The abstract nouns and epithets which regularly collocate with the term often denote negative emotions and psychical states. These words are frequently found in the *mantras*, and the fact that they are to be associated with Rakṣasas appears stated only in the Brāhmaṇa portions.

(3) The *Taittirīya Saṃhitā* is noteworthy for its attempt to identify the Rakṣasas with hatred or with persons who hate the sacrificer or whom the sacrificer hates.

*Library Staff,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*